

# 市史編さんだより



(65)

## 寺子屋と国学思想

幕末維新期の久米川村に伊東謙斎という「手跡師範之人」がいた。「手跡師範」とは寺子屋師匠のことである。謙斎の本業は医者であったから、手跡師範は余暇の仕事であった。

謙斎は上総一宮の出身で、安政三（1856）年に榎本市右衛門（一老）を訪ねて東村山に來り、短期間とどまり医者を開業したという。明治六（1873）年に久米川村に一戸を構え村民になったと伝えられている。安政三年より明治六年の間は不詳であるが、やがて土着するほどの密接な

関係をこの地ともつていたようである。寺子屋師匠から明治期に恵心学舎（久米川学校）の訓導になった榎本貞義（一老の孫）は、この謙斎に和洋算、理科を学んでいる。謙斎は国学思想の影響をうけた人物でもあった。

当時、南秋津村には平山協斎という医者もいたが、医者や寺子屋師匠は村のインテリであった。東村山にはこのほか野口村に武藤良由、南秋津村に鈴木兼次郎の寺子屋師匠がいたが、彼らの思想的系譜は明らかでない。

大岱村の市川幸吉（東村山最初の県会議員）は幼時、久米川村の榎本一老に習字や四書五経を学んでいる。この榎本、伊東、平山らは単なる寺

子屋師匠ではなく、中等教育を担当する家塾の教師でもあった。市川は長じて剣道を山岡鉄舟、甲源一刀流の比留間良八（彰義隊組頭）に、国学を駒木野閑（現八王子市）の関守落合直亮に学び、出流山事件（薩邸浪士隊）の隊長竹内啓（川越在入西村名主）とも交っていた。

彼は幕末期、関西への政況視察に旅行中、「玉の緒も絶えなはたへね君のため、国のためにしなを厭ふべき」という熱烈な尊皇攘夷の思想を歌に込めている。立派な草莽の志士の一人であった。市川は榎本一老に師事した時より種々の論説を書き、国事（政況）の変化に注目していたというから、寺子屋から家塾にかけての中等教育のなかに国学の影響があり、時代の波が東村山にも押し寄せていたことが判明する。

また、当時、所沢の下新井

村名主に森田七郎右衛門なる人物がいた。彼の交友関係は同村の越坂部雅雄、本郷村医師木下信助、北野村沢田新五郎（北広堂）、久

米川村伊東謙斎、田無村医師賀陽玄雪、芋窪村石井以豆水、勝楽寺村（山口貯水池底）石山都筑らの医師兼寺子屋師匠、神主らがいたが、交友の中心は国学思想であった。森田は維新による新政府の成立を、「狂気の舞ひ足の踏むを知らざりき」と喜び、「つきたつこのひもろきをいかに思ふ、皇御国の大道のため」と歌っている。本居宣長を祀る桜木神社を創建し、天皇思想の普及に尽したが、成立した明治国家が、天皇制国家たることを喜んだのである。近代におけるこの地域の天皇思想もこうして準備されたのである。

近代担当 渡辺隆喜